



かぐら 神楽の涙

教育長 津野庄一郎

毎年秋、下関祭りの日は、「神楽」が我が家に来て一節舞ってくれました。^{ししがしら}獅子頭は男性・^{おはやし}お囃子は女性のご夫婦だったように思います。父親に尋ねると「岩船のしょ」とのこと。幼いながら口上と踊りは「すごいな〜」と感心して見ていたものでした。そんな神楽は今年、年配の男性お一人でした。

関川村は無形文化財（伝統芸能）として、「大石神楽（1977年指定）」と「上土沢神楽（1978年）」の二つを指定しています。人々の娯楽だったり、五穀豊穰・無病息災のお祈りだったりしたのでしょう。この他、女川の南中集落には神楽から派生した「剣の舞」（わが郷土：関川村立女川中学校4・5・6・7集、1989年～1992年版掲載）があり、子どもたちが調査研究して復活させ、文化祭で披露したとあります。現在、大石神楽はスタッフの高齢化と後継者不足で中止を余儀なくされているとのこと。上土沢神楽は、小島正さん（同級生）ら保存会の有志が、毎年8月末の秋葉さまのお祭りで奉納していると聞きました。「剣の舞」の継承は、どなたに尋ねてもよくわかりません。ただ、東京・表参道にあった新潟館ネスパス開館（1997年）の際に、踊ったという話を聞いたことがあります。

関川村70周年の節目、教育委員会では「関川村史の追補編^{ついはへん}」を発刊すべく、編集作業を進めています。（委員長：安久昭男・教育課担当：渡辺一洋・令和7年春刊行予定）村史編纂から32年余の歳月が流れ、その間、村内の環境や生活様式も大きく変わりました。これらを記録に残すことは、後世への貴重な資料として、関川村の歴史的な変遷の正しい理解と文化の継承・発展及び発信に寄与することでしょう。

ふるさと関川村に残る文化を、時代の波にゆだねてはならない。関川村で生まれ育ち今を生きる人たち、そして、明日の未来を生きる子どもたちのものだから。今、世界に誇る大したもん蛇まつりを創造した関川村の底力が試されているようにも感じます。

【写真】大石神楽（村ホームページより）